

飯山市の小沼箒を全国に

飯山市立城南中学校 前澤 大介

1 はじめに

昨年、信州社研松本支部の研究部会で松本市の伝統産業を教材化した授業を行い、その中で「松本箒」と出会った。調査を進めていく中で、長野県内で箒生産として有名なのは松本箒（米沢ほうき工房）と飯山市の小沼箒だと知り、故郷である飯山市の伝統的工芸品としての箒生産に興味を抱いた。今年度、城南中学校に赴任したことを機に、内山紙、飯山仏壇といった飯山市を誇る伝統工芸に並ぶ小沼箒の現在とこれからについて調査を行ってみた。

2 調査内容

(1) ホウキモロコシとは

イネ科 モロコシ属の一年草。畳に使うと、草が持つ油分などで艶がでると言われており、江戸時代頃から職人たちが箒の素材として使っていた。こしが強く、穂先の部分が箒の材料として使われる。現在の日本では生産量がわずかとなっている。

(2) 小沼箒の歩み

①小沼箒の始まり

明治初年から生産が行われ、冬期間の豪雪地帯において、出稼ぎに出られず残留した人々によって手仕事で作られ副業の地位を占めた。

②小沼箒の発展と衰退

最盛期は昭和20年(1945年)代から30年(1955年)代で、2～3件の家が共同で持つほうき小屋と呼ばれる共同作業所が10数箇所あり、ひと冬に3万本以上を生産したが、住宅様式の変化や電気製品の普及により、平成30年(1955年)1月に小沼箒生産組合は解散した。

③伝統の継承への動き

解散後、小沼箒を継承する気運が高まり、平成30年(2018年)5月に「小沼ほうきを守る会」が発足し、8月に団体名を小沼ほうき振興会に変更した。小沼箒はスキー場や旅館でも愛用され、その技法は下高井農林高等学校の授業に取り入れられるなど地域ぐるみで生産と販売に取り組んでいる。

④長野県伝統的工芸品に指定

○指定日：平成31年3月22日

○指定要件

- ・主として日常生活の用に供される
- ・製造工程の主要部分が手工業的
- ・伝統的な技術・技法で製造される（おおむね50年以上継続）
- ・伝統的に使用された原材料で製造される
（主たる原材料がおおむね50年以上継続）
- ・当該工芸品を製造する事業者が5者以上



(3) 小沼箒への思いと現在（田中健吾さんより取材）



◎田中さんご夫婦の実演
熟練の技術で、正確で手際よくホウキモロコシを結っていく。楽しそうに作り方を語る姿に、箒へのこだわりを感じた。

- ・15本ほどのホウキモロコシを束ね、5玉ほどを一本の箒にし、11玉を最高として販売。
- ・竹のかんざしを入れてあることが小沼箒の特徴で、丈夫な作りになっており、外国産に比べて長持ちする特徴がある。屋内から玄関、庭へと古くなくても使い切れるように工夫している。



◎竹のかんざし
小沼箒の特徴である。



◎箒を結うための台

- ・糸を巻く力加減が非常に難しい。緩くては箒として使えない。年齢が上がるにつれ、力作業が大変になってきた。

- ・どんどん使ってもらって、始めて小沼箒の良さが分かる。

- ・以前は良い竹屋があり、良質な竹を柄にしていた。しかし、残念ながら竹屋が閉店してまった。現在は、より良い竹を選び、絵を入れることで使用して下さる方に喜んでいただけるように工夫している。

- ・大勢いた生産者は現在2人となった。作れる数に限りはあるが、遠くは北海道からも注文が入る。雑誌に取り上げられたこともあり、県内外から直接買いに来てくださる方や、リピーターも増加している。

○今年度は上田の井上百貨店で展示会を実施した。大勢の方に小沼箒の魅力を感じていただけた。



◎柄の工夫
独特な竹を選び、絵を加えて芸術性が高めている。

(4) 飯山市における小沼箒の展望（飯山市役所 雇用ビジネス推進課 高橋さんより）

- ・将来的には販売数を増やし、作り手の利益を大切にしたい。後継者が増えるように、作り手にとって張り合いのある産業でなくては行けない。

- ・高校生の取り組みはとても嬉しい。これからも大切にしたい。

- ・小沼地区に限らず、周辺地域の連携も作りたい。地域としての役割を上げていくことが必要。

- ・飯山市を代表する伝統産業として、今後も日本中の方々に使っていただけるようにしたい。

第1回ほうきサミット 日程	
10:00~	開会行事 学校長あいさつ グリーンデザイン科地域資源活用コースの活動について
10:30~	講演会 演題「小沼ほうきにける思い」 講師：「小沼ほうき生産組合」最後の組合長 田中 健吾 氏
10:45~	休憩
11:00~	小沼ほうき 実演 田中健吾さんご夫妻 ミニほうきの製作
12:20~	終わりの会
12:30~	軽食（農林高校そば班提供）

◎下高井農林高等学校で行われた「ほうきサミット」

(5)城南中学校の生徒の様子から

①伝統文化を学ぶ3年生の公民授業で

- ・小沼箒について知っている生徒と知らない生徒が半々だった。
- ・学校で使用している箒と比較し、小沼箒の堅さを感じていた。
- ・匂いの良さを感じていた。
- ・柄の工夫（竹の形状や挿絵）に関心をい多く生徒が多かった。

〈生徒の感想より〉

飯山がほうきの産地だとは知らなかった。よく考えたら、家にもあるし身近なものなんだと思った。学校で使っているほうきはほとんどが中国製だと聞いたけど、僕たちが小沼ほうきを選んで積極的に使うようになることが飯山市の伝統産業を守ることになると思った。

②実際に小沼箒を使用してみた（1年生の学級に常設）

〈生徒の感想より〉

普段学校で使っているほうきよりも堅くて、掃き心地が違うと思った。何ヶ月も使っているけど、形が変わらないがすごいと思った。小沼箒のことはあまり知らなかったし、掃除の時に箒のことを意識したことが無かったけど、飯山市でこんなにいい箒が作られているのが嬉しい。これから



3 おわりに

「小沼箒」は、飯山市に住む方々にとっていつも身近なものであった。現在、生産者の減少により生産本数はわずかになっているが、あらためてその価値が見直され、飯山市に限らず県内外で注目を集めている。下高井農林高校の生徒をはじめ、「小沼箒」にふれた城南中学校の生徒といった次世代を担う子ども達にも「小沼箒」はこれからも守り続けたい飯山市の伝統産業となった。

社会科を担当する私は常々生徒に郷土を愛する心を育ててほしいと願っている。今回の調査では、まだ不十分な点もあるが、飯山市で生活する子ども達にとって教材としての価値は十分にあり、郷土に興味をもつことができると感じた。飯山市は「飯山仏壇」や「内山紙」など、様々な伝統産業が職人の技と共に継承されてきた。それに比べ、生産者が二人と衰退をしてしまった「小沼箒」が今後さらに発展するために、現代の私たちと多くの子ども達が目にし、何かしらの形で関わっていけるように、中学校で社会科教師としてできることを考えていきたいと思う。

〈参考文献・資料〉

- ・長野県 HP
- ・北信ローカル（2018年6月8日）
- ・信濃毎日新聞(2019年9月4日)
- ・田中健吾さんより取材
- ・飯山市役所雇用ビジネス推進課